１６:３０～１７:００　　クロージング「ＮＰＯのこれから」

■分科会報告

第１分科会

報告者：**山本康史**（ハローボランティアネットワークみえ代表）

第２分科会

報告者：**中盛　汀**（ふるさと鉄道保存協会ワフ 30037 伊賀ワーキンググループリーダー）

第３分科会

報告者：**石阪督規**（三重大学助教授）

■総括コメント

山岡義典（日本ＮＰＯセンター代表理事）

■閉会宣言

山本康史（ＮＰＯ法施行 10 周年・みえパートナーシップ宣言 10 周年事業実行委員長）

■ 分科会報告

第 1 分科会

（報告者：ハローボランティアネットワークみえ　山本康史）

先駆者と語ろうということで、10 年なり、20 年なりのＮＰＯ活動を続けていらっしゃった方、3 人の方に出演していただきまして、どうやって 10 年間継続してきたんだろうということをお話いただきました。

それぞれの活動で、10 年なり、20 年の間に、こんな危機があったよということで赤裸々な話をいただきました。例えば、理事会で来年度やる事業が否決されそうになって、もめたんだとか、会員さんがＮＰＯの活動から離れて有限会社を立ち上げ同じような事業を始めたなど、こういう話を含めて、苦労を乗り越えてみなさんがんばってらっしゃったんだなということがわかる分科会でした。

逆にうれしい話ということでは、自分たちの活動に全く関係ない地域の人がほかのサービスを受けるべき人に伝えて、自分たちのサービスを使ってもらえる様になってうれしかった、地域が変わってきたということを実感しました、という話もありました。

結論として、10 年継続するＮＰＯの極意は何だろうということで、議論としてはできなかったのですが、私が感じたのは、「熱意」だなというところです。

それぞれやる方が自分たちがモデル事業を作って行くんだというプライド、それが自分を動かしていく。山岡さんの話にでてきた気づき、気づいちゃったらやらざるを得ない、やっちゃってる、そういう思いが一番大事だなというところが、みなさんに感じていただいたことだと思います。

苦笑いしたのは、ＮＰＯ法人継続していくため、大切なのは人と金と物だけど、人って、「後継者いないよね～」という話がされたりしました。つまり、自分たちは熱意だけで動いてしまっているけど、これを他の人に受け次ぐ、押しつけるってできないね、という話もありました。

これからみなさんさまざまな形でＮＰＯの事業推進していかれることと思いますが、大事なのは、一つは熱意だなということが、第 1 分科会の共有できた部分です。

みなさん、自分の熱意ということをふりかえっていただければと思います。

第 2 分科会

（報告者：ふるさと鉄道保存協会　中盛汀）

第 2 分科会について、詳しくは資料を参考にして下さい。

一番始めの事例発表、チャイルドライン 24 実施組織からは、事業を通して 3 つのパートナーシップが進んだというお話がありました。行政と行政の部署間をこえた連携がなかったが、そこを取り組んでいけたこと。また、行政とＮＰＯとのパートナーシップもなかなか難しかったなかで取り組んできたこと。実際、子どもに関わるＮＰＯ同士も横のつながりが弱かったが、実施組織を組織する中で、構築する中でとりくんできた。

いろいろなご苦労も 21 ページからのなかでまとめてくださってありますので、参考にみてください。ふるさと鉄道保存協会からは、企業との連携ということで、企業の協力がなければ、鉄道に関する活性化の取り組みは、勝手にできませんので、いっしょに進めてきたという話をさせていただきました。

企業さんからお金をいただくのではなく、企業さんに儲けていただく企画を提案しつつ、実施をしている。

三重銀総研さんからの報告は、28 ページからですが、ＮＰＯとの出会いのなかで、ＮＰＯローンなどいろいろなとりくみを展開して下さっているという報告をいただきました。

パネルディスカッションでは、伊賀市の市民支援活動センター前川さんにも入っていただきました。

行政の立場からお話いただきましたが、自分たちのいうことを聞けというだけでなく、民も育たないといけないということだとか。三重銀さんからもあったのですが、職員の意識改革もまだまだネックとなっていることも課題としてあったかなと思います。

最後に話題に出ましたが、地域の組織、地縁組織の連携はまだまだ弱いところも多いみたいですが、これから連携することでまだまだ可能性が広がるのではないかと思います。

第 3 分科会

（報告者：三重大学助教授　石阪督規）

私は、ＮＰＯに直接関わっていませんので、むしろちょっと距離をおいてＮＰＯにかかわっている方々の活動を見させていただいた。32 ページ以降に 3 方の活動が書かれていますが、

まず、松阪市民活動センターの米山さんの話でしたが、ここはまさに、人と地元の商店街をつないでいくことに力点が置かれていて、商店街が非常に疲弊しているが、どこもそうなんですが、そこをなんとか活性化させたい。市民団体は、一つにまとまらない、お金がないという問題をかかえている。

それらをまとめ、うまく橋渡しをすることで地元の商店街を再生させていくという話を伺いました。商店街がダメだダメだといっているだけでなく、新しい知恵、アイデアでこうも変わっていくという事例の紹介。勉強になりました。

2 人目、松井さんのご報告。四日市でもの言う市民活動セクターということで、新聞記事が 41 ページに記載されていて、先の四日市市長選の前、ＮＰＯセクター会議が市長と提言をとりかわしていく。すくなくとも、個別に力が弱いＮＰＯばかり、自分たちがこういうことをしたいと思っていても、政治や政策として実現しないということが一つの課題になっていた。ＮＰＯが一つにまとって、大きくなることによって、より政策提言がしやすくなる。自分たちの思いを首長や議会に伝えるための一つの手段としてセクター会議があるとすれば、有効な手段。むしろ単体であれば脆弱。一つにまとめれば大きな力になることを紹介していただいた。

むしろ、これからはＮＰＯと政治がどうあるべきかという非常に大きな課題や問題を我々は勉強したような気がします。つまり、中立で、政治に関わらないＮＰＯでいいのかどうか。

もっと自分たちが発言する。議会や首長にものをいうという姿勢も必要なのではないか。これからのＮＰＯを考えると大きな課題なんじゃないかなと思う。

3 人目の藤岡さん。名古屋で手広くＮＰＯの支援をされている方。イギリスにも何度も視察に行き。本場イギリスのＮＰＯ支援のあり方を学んでこられた方です。

その中のお話で印象に残ったのは、これからは、ＮＰＯを束ねる中間支援組織がもっと大きな力を持たなければいけない。行政も今まで補助金を出すときには、個別のＮＰＯみんなに補助金ばらまいてきた。それだったら何の意味もないでしょう。たとえばイギリスだったら、中間支援組

織にまとまった大きいお金がどーんとくるそうです。先端を行ってるＮＰＯに渡していって、それがどんどん積み重なっていく。これがＮＰＯを前進させるためのイギリス流のやり方だそうです。

こういう話を聞くと、今の日本のＮＰＯのあり方は、補助金ほしさに行政の下にぶら下がっているだけというイメージがある。これではいけない。という問題提起をいただき、ＮＰＯはぶら下がっていちゃいけない。ものを言ったり、自分たちの立場を主張しなければならないときもある。

まとめるのが非常に難しいのですが、一つ言えることは、ＮＰＯは単独で何かやるのは厳しい。人もお金もむずかしい。

そのときに、我々に方向性を与えてくれるのは、みなさんでいっしょになる。そのためには、今までのような中間支援組織は脆弱です。地域によってもばらつきがある。中間組織ネットワークのようなものをつくって、もっとＮＰＯがまとまっていろいろ情報共有したり、場合によっては政策共有出来るようになって、いろいろな活動的なＮＰＯ、その上には、中間支援組織を作っていく必要があることを実感させられました。

中間支援組織は地味ではありますが、各地でいろいろな活動がされていることを伺って勉強になりました。むしろ、単独のＮＰＯはもっと中間支援組織を利用して、行政との窓口として利用していただいて、有効な支援のあり方をみなさん自身が考えていくことが、今後必要になっていくだろうという気がしました。

議論が白熱し、有意義な分科会でした。

■　総括コメント

（日本ＮＰＯセンター代表理事　山岡義典）

市民社会の底力がついたこの 10 年

3 つの分科会に 30 分くらいずつ覗かせていただきました。

この 10 年でいろいろなことを思います。東京などで話すとき、ＮＰＯはいろいろやってきたが、何もできなかったじゃないかという言い方を時々しています。その実感があります。社会にこれだけ大きな問題がおこっている、自殺が 3 万人を超えて一向に減らない。いったいＮＰＯ何をしているんだ。路上生活者、ホームレスはどうか。児童虐待は減ったのか、どんな社会的な課題を見ても増える一方。増えないまでも減っていない。世の中、本当に良くなったのか。3 万 6 千もＮＰＯ法人ができたが、社会がどうなったかというと、何もできていないんじゃないかという実感を、時々持つわけです。

そういう意味でいうと、この 10 年、やっと次の 10 年のためのエネルギーを蓄えることはできたが、社会を変えるところまではいかかった。小さな意味では、いろいろ変える実験はしたけれども、大きなところで社会を動かすところまでいっていないというのが実感ですが、しかし、この 10 年、やはりすごかったなあとも感じます。

今日も 3 つの分科会を少しずつ見せていただいて、これだけの議論が市民レベルでできている。相当突っ込んだ議論です。それも観念論ではなく、具体的な事例に基づいて、哲学的でもあり、政策的でもあり、倫理的でもあり、ものすごいことが市民の間で議論できるようになった。それも、単なる研究家の集まりでもなく、行政マンだけの集まりでもない。社会運動家だけの集まりでもない。多様な人たち、分野も、福祉の分野の人たちだけでない、環境の分野の人たちだけでない、まちづくりの人たちだけでない。いろんな分野のいろんな人々。年齢もいろいろです。若い人がちょっと少ない

かなという点はあったが、でも、他に比べるとたくさんいる方です。地域によっては、出席者の平均年齢は 60 歳以上ではないかというところもたくさんあります。今日は、男女比もいいバランスです。

この 10 年の間に市民社会の基盤ができた。それはダイアログ、対話ができるようになったということです。これが基本だと思います。第 2 分科会の最後で、地縁組織とＮＰＯで重要なのは対話だよ、対話の積み重ねがないとできないね、という話がありました。私は、パートナーシップの前に対話が必要だと、最近よく言っています。その対話ができるようになった。今日聞いていても、ものすごく深い対話です。単なる好き嫌いの話ではなく、具体的な実践事例に基づいてこれだけの対話ができるようになったということは、この 10 年、日本の市民社会の底辺ができあがりつつあるなと、実感いたしました。

私は 10 年前に、日本各地でいろいろな議論をしてきました。そのときは、やっとこういう議論ができかかった時代ですが、これほど多くの実践事例にもとづいてリアリティのある議論はできていなかった。今は違う。リアリティのある議論になっている。単なる事例報告でなく、お互いが一つひとつの事例を評価しながら、冷静に見つめ合いながら、報告しあえるようになった。議論、ダイアログができる社会ができつつあるんだなと、3 つの分科会を通じて実感しました。

「Ｉ」⇒「N」⇒「P」ということ

今日の講演の中では言いませんでしたが、私は、よく、「Ｉ」⇒「N」⇒「P」と言います。そのことを今日強く感じました。

「Ｉ」は、インディペンデンス、独立、自立ということです。とにかく何があろうと俺たちはこれをやるんだという自立の話です。第 1 分科会で、熱意ということがでましたが、まさにインディペンデンスです。なにがあろうとやるんだということです。千万人といえども吾往かん。この自立の精神。これが、「Ｉ」、インディペンデンスです。

その次に、「N」はネットワークです。第 3 分科会は、ネットワークの議論が行われた。「Ｉ」に基づくネットワークです。それぞれの関係者が自立した活動を行ってネットワークをしている。そのネットワークを背景にもっているから、しっかり話してくれて、また聞いてくれるんです。ネットワークを持たず、単独で話をしていてもなかなかしっかりとは話を聞いてくれませんが、いろいろな考えを持つ人たちがひとつのネットワークをもって、そのネットワークの中で対話したら、深い対話をせざるを得なくなります。ＮＰＯはネットワークをもったら強くなる。

その上に、「P」のパートナーシップがあります。「Ｉ」抜き、「N」抜きパートナーシップとよく私はいうんですが、「Ｉ」もなければ「N」もない。だけど、とにかく行政と何かやりたい、パートナーシップをしたいというのが最近は増えている。まさに参加もない。ただ、パートナーシップだけをめざして、パートナーシップとは何ぞやという議論をやっている。それは虚しい。「そんなのやめなさい」とよく言うんです。

今日みなさんが議論したのは、第 1 分科会はインディペンデンスの話でした。第 2 分科会は、対話の話だったんじゃないか、ネットワークの話でもありました。第 3 分科会は、ネットワーク化の話。中間支援組織は、ネットワークがないとできないんです。ネットワークなき中間支援組織というのは、大したことはない。尊敬もしてもらえないし、役にも立たない。

日本ＮＰＯセンターのスタッフは 5、6 人しかいない。ほとんど外に出ているので、事務所にいるのは一人がふたり。全国にいろんなネット

ワークをもっているから、いろんなことができる。企業関係のネットワークもあるし、行政関係とのネットワークもある。

そういう意味でいうと、ネットワークを持たない個々のＮＰＯは、どんなに熱意があって、インディペンデンスがあっても弱い。ネットワークをもったＮＰＯが協働するから、協働も本物になる。

今日の議論を聞いていると、講演で言わなかったけれども、みなさんの議論の中に、まさに「Ｉ」⇒「N」⇒「Ｐ」の重要性ということが、きちんと議論されたんじゃないかと思いました。「Ｉ」と「N」の重要性が、各分科会でしっかりと議論されたんじゃないかという気がしました。

協働の前に対話の積み重ねを

今日のようなこういう議論を、10 年に１回だから今度は 10 年後、20 年後ということではなく、毎年１回くらいやってください。日本ＮＰＯセンターも以前は「協働フォーラム」としてやってきましたが、「協働」じゃないよね、「協働」の前に「対話」が必要だねということで、4、5 年前から、「ＮＰＯと行政の対話フォーラム」をやっています。それと「ＮＰＯと企業の対話フォーラム」も。

協働するかどうかは、どうだっていい。しかし協働はしなくても対話は必要。対話の中から協働が生まれるかも知れないし、生まれないかも知れない。対話というと 2 人でやるみたいですが、鼎談でもいい。みんなでやってもいい。いろんな異質な人間、いろんな価値観をもつ人間が、なんらかの形でディスカッションを積み上げていく、異質な人間が対話をつみあげていく定常の場、月１回でもいいし、年１回でもいい。そういうものを持ってほしい。

行政、企業、ＮＰＯ、研究者、そういう人がだれでも出入りできる対話フォーラムをきちっと定常的につくっていく。10 年に 1 回でなくて、もっと頻繁に。それが市民社会の底力をつけることになるし、企業が変わるきっかけ、行政がかわるきっかけにもなる。

是非、持続ある対話をこの地で実現してもらいたい。と同時に、県レベルでやるのもいいけど、それぞれの地域ごとに対話の時間をもっていただいたらいいと思います。

ありがとうございました。

■　閉会宣言

（実行委員長　山本康史）

最後のいい締めを山岡先生にしていただきました。

これから私たちがめざすべき方向性が、組織として、セクターとして、一つ二つ見えてきたのではないかと思います。

クロージング宣言を行うにあたりまして今回みなさんの中でお話がなかなかできなかった私自身の疑問を含めて、ひとこと話をさせていただいてクロージングとさせていただきます。

今日ここに集まっていただいたみなさんは、多くはＮＰＯの担い手のみなさんと思います。これからものすごく早い勢いで社会が変わっていきます。わたしは、本業の製造業の方でも、変化に翻弄されています。今の経済、社会の変化はおそらく、それほどいい方向に変わってい

く訳ではない、この変化を市民活動セクターの表現で言い換えると、社会的なニーズは増えていくと思われます。

一方で、私たちの資源はどうでしょうか。ひと、もの、かね。この資源はニーズの変化に対応して、資源は増えていくでしょうか。私がＮＰＯに割く時間はこれから増えて行くでしょうか。おそらく減って行くでしょう。そんな中で、社会の変化に私はどう対応していくのでしょうか。

今回の事業の中で、ＮＰＯセクターとしての方向性は出たと思うのですが、一方、私たち一人一人がＮＰＯと言う活動に対してどうむかっていくのか。これからの 10 年というのは、おそらく変化をさせなければいけない。

これは私の個人的な感想ですが、みなさんはどう感じたのでしょうか。もし、変化していかなければいけないとすれば、企業が変わり、行政が変わりというなかで、ＮＰＯ、その担い手である私たちも変わっていく必要がある。私たちの思い、行動、活動分野、いろんなものを再構築していく時期に来ているのではないかと感じています。みなさんはどう感じているのでしょうか

変化はあってもそれをうまく吸収できるような、三重の力強いＮＰＯをこれからみなさんといっしょに作っていきたいと思います。

本当にみなさんおつかれさまでした。ありがとうございました。